

## 交流する人々 (2) — 呉市御手洗地区における重伝建を考える会の活動を中心に —

大 藤 文 夫\*

### People Who Participate Interactive Activity between Rural and Urban Communities (2) — Consideration about the Association utilizing Important Preservation Districts of Groups of Historic Buildings of Mitarai district in Kure City —

Fumio OOTOU

Mitarai district in Kure City was selected as the important preservation districts of groups of historic buildings in 1994. Since then, the inhabitants' organization "the group that thinks important preservation districts of groups of historic building" has been working on community development through interactive activities. Through activities conscious of outside, the residents lighted with lights. The activities in 20 years has become a stage to tackle the sustainability of the community.

The group that thinks important preservation districts of groups of historic buildings is an association consisting of volunteers in the area and those who went out to other districts. However, it has been revitalizing the area by firmly taking root in the area.

It is difficult to nurture a player in a depopulated area. In that case, it is natural to find a player in the outside. It is possible to do community development like this.

#### Key Words (キーワード)

Interactive activity (交流), Important preservation districts of groups of historic buildings (重要伝統的建造物群保存地区), Association (アソシエーション), Sustainability (持続可能性), Community development (まちづくり)

#### 1. はじめに

筆者は、平成20年に、呉市豊町御手洗地区の重要伝統的建造物群保存地区を活用した取り組みを、交流まちづくりの文脈で紹介したことがある。そこでは御手洗の取り組みを概ね以下のように指摘した<sup>1)</sup>。

御手洗地区は大崎下島にある。架橋は2008年11

月であり、前回調査及び前稿執筆時点では、なお離島であった。人口は296人(住民基本台帳2008年9月末)で高齢化が進んでいた。重要伝統的建造物群保存地区の選定(1994年)により、建物は色や建築方式などに統一性があり、景観保存の努力がなされている。ただし雨戸がおりたままの不在家屋もかなりある。観光客対象の店はなく、交流施設として潮待ち館があった。

---

\* 広島文化学園大学 社会情報学部 (Faculty of Social information Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

保存地区の選定は行政主導で進んだ。それを受けて、住民組織「重伝建を考える会」（以下、考える会と表記）がつくられた。「選定されたことで観光客が来る。どう対応するのか」、「御手洗をなんとかしないといけない」と考え始めた住民有志が立ち上げたものである。

考える会はまち並を活用する活動を行ってきた。例えば観光客相手のガイド、歴史と文化を学ぶ勉強会、情報誌『みたらい通信』（第6号以降は『御手洗通志』）。以下、御手洗通志と表記）の発行、まち並みや神社等の清掃活動などである。

活動のスタート当初は、多くの住民は「観光客なんか来るわけがない」と思っていたそうである。観光ガイドも、「暇だからやっている」、「好きでやっている」と思われたとのことである。

しかしイベント（著名人を招いての雅楽コンサート、俳句の会）の地元グループとの共同開催で、御手洗地区の再認識、再評価を促していった。

やがて住民の見方が変わってきた。その頃に「住民皆ガイド」を提唱した。住民が客にガイドをしよう、それが難しければ、潮待ち館に行けばガイドしてくれる人がいるといおう、それが難しければ、挨拶しようという運動である。それによって住民の意識が変わったとのことである。

考える会の活動を通して住民の心に灯りがともった。ガイドの勉強会で歴史を再認識していく。客に物語を語ることで、客に感動を与える。このように客を意識した活動を行うことは、結果としてまちづくりのエネルギーを生み出すことになる。

前稿では、併せて、観光と交流の区別をしておいた。観光は産業として大きな金を産み出そうとするが、当時の御手洗の状況では、産業を志向するとは明言できなかった。また実際に行っているのは、特別にあつらえたものではない、自分たちの普通の生活世界を味わってもらうことである。それゆえ御手洗で取り生まれているものを、観光とは区別して、交流とした。以下でも御手洗の取り組みを交流として扱う。

確かに交流は招く側にとっては、自分たちの生活を客にも開くことである。それが招く側の生活を乱さないのは、両者が作法を守っているからで

ある。前回調査ではガイドをしてもらい、そこで確認できたことは以下の点であった<sup>2)</sup>。

私たちを案内してくれたガイドさんは、客に喜んでもらうために、まず自分が健康であることに留意し、そのためにウォーキングをしていた。そして客に楽しんでもらうためには、自分が楽しむことが必要とのことであった。具体的には、友人と誘い合って、夕方、丘に登り、夕日が沈むときには波が金色に輝くのを見て、月が上がるにつれて波が銀色に変わっていくのを見る。夜になるとみんなが持ち寄ったもので食事し、その後、寝ころんで夜空を見上げると、星が手に届くような近いところに見えるそうだ。なんともうらやましい話である。回りを海に囲まれた島であり、夜の灯りの乏しい過疎地域だからこそできることだろう。こういうことを語られると、ぜひ夜も御手洗にいたいという気になる。

またガイドさんは若胡子屋であった悲しい物語を、紙芝居で演じてくれた。芝居調の話し方で、とても感情のこもったものだった。ずいぶん練習したのだろうと思われた。自分が楽しいと思ったこと、感じたことを、客にわかるように準備や努力をして伝える、これがガイドさんの作法だろう。

他方、客にも作法は求められる。ガイドさんは「話は聞いてほしい」といっていた。これは最低限の客の作法だろう。話を聞きにきている、体験しにきている、そうであれば最低限の作法である。その他に、ガイドさんにもっと話を引っ張り出すような質問をする、感心したこと・うなずけることは、そのように声や表情に出す。それによってガイドさんを喜ばすことができれば、さらにベターな作法だろう。交流客もまた作法を持つべきである。このような接し方がなされているとき、客は同志＝仲間になるだろう。

このように、交流まちづくりの好例として御手洗地区を紹介した。その後、御手洗地区の取り組みはどのように展開したのだろうか。本稿では、考える会の活動を中心に、前稿執筆時からほぼ10年たった時点での実情を紹介する。

#### 【倫理的配慮】

関係者への聴き取りに当たっては、本調査の目

的・趣旨・結果の公表について文書と口頭で説明し同意をえた。なお本研究の実施に当たっては、広島文化学園大学社会情報学部・社会情報研究科倫理審査委員会に申請し、承認をえて行った。

## 2. 架橋後の活動

### (1) 御手洗まちづくり憲章

架橋後は観光客が増加した(図1)。その中心は家族連れの個人客である。しかし御手洗地区は、短時間で回ることができる(ガイドをつけても2時間弱)こと、食事処の少なさから、滞在、大きな消費が当てにできる観光産業化はなしえていない<sup>3)</sup>。

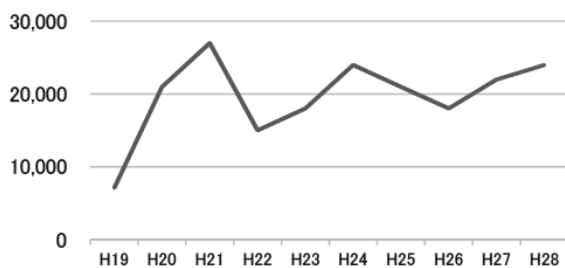


図1 架橋後の観光客数の推移

出典：呉市作成，呉市豊町御手洗（広島県）

表1に、前回調査後の御手洗地区に係わる事項を挙げた。核となる施設整備(町並み交流センター「菊伝」、御手洗休憩所)のほかに、碑建立、説明版設置、イベント(演芸会、俳句会、フォトコンテスト、写真展、茶会)、シンポジウム、講演などが行われている。アニメやドラマを利用した情報発信は今日的手法といえよう。また、まちづくり活動(ワークショップ、豊町魅力アップ事業)に取り組むようになったのは新しい展開である。なお保存修理に関しては毎年度行われている。

この中で大きな取り組みは、2017年2月につくられた「御手洗まちづくり憲章」である。もともと「豊町御手洗伝統的建造物群保存地区保存計画」は保存についての計画であり、利・活用について積極的に触れるものではない。同憲章は重伝建を考える会のこれまでの利・活用活動を踏まえ、さ

らに御手洗地区のこれからのまちづくりの方向を定めたものである。

憲章の内容は以下のようなものである。

#### 前文

私たちは、江戸中期から昭和初期にかけて繁栄した御手洗の町並みや自然景観、歴史、文化等がかげがえのない資産ととらえ、これを守り、活用しながらこの町で暮らしていくことで、その佇まいを後世に引き継ぐことを目的に、この憲章を定めます。

このように、町並みにとどまらず、自然、歴史、文化等がかげがえのない資源ととらえ、これを守り、活用するとある。考える会の活動はこの考えに即したものであったし、何よりもこの町で暮らしていくことで後世に引き継ぐという点に、まちに対する姿勢が明確に現れている。つまり御手洗は観光世界のように、生活世界から切り離された空間にするのではなく、生活世界そのものとして磨いていくのであり、そこに客を迎え入れるということである。まさに交流まちづくりの考えである。

#### 基本理念

##### (建物)

先人から受け継いだ貴重な町並みと、歴史的な建造物を守ります。

##### (景観)

瀬戸内の自然と歴史遺産とが織り成す、美しい景観を維持します。

##### (風情)

集落の秩序と美化を心がけ、風情ある懐かしい佇まいを保ちます。

##### (文化)

地域に根差した歴史と文化を顕彰し、その継承と発信に努めます。

##### (交流)

住民みなガイドを合い言葉にして、気持ちよく来訪者に接します。

表1 架橋後の事項

■町／市の歴史 ●住民活動 ▲その他

年度	事項
2008	▲豊島大橋開通で「安芸灘とびしま海道」が全線開通 ■町並み交流センター「菊伝」（旧柴屋住宅）オープン ●豊島大橋開通記念イベント「御手洗町民演芸会」 ■2008年度保存修理（間接事業6件）
2009	▲NHK広島発地域ドラマ「火の魚」ロケ（7月放送） ▲NHKドラマ「火の魚」地元上映会 ●重伝建選定15周年記念イベント（俳句会・フォトコンテスト・企画展示） ●重伝建地区選定15周年記念イベント「御手洗演芸会」 ■2009年度保存修理（間接事業4件）
2010	●「中村春吉碑」建立 ■「若胡子屋跡」修復工事（耐震補強） ■2010年度保存修理（間接事業3件）
2011	■「旧金子家住宅」を市有形文化財指定 ▲テレビアニメ「たまゆら（1期）」放送開始 ●「若胡子屋跡」の活用を考えるワークショップ ■2011年度保存修理（間接事業2件）
2012	▲アニメ映画「ももへの手紙」地元試写会 ▲広島県が「もも旅」観光キャンペーン展開 ■2012年度保存修理（間接事業2件）
2013	■「御手洗休憩所」オープン ●豊町観光協会移転に伴い「潮待ち館」閉鎖 ▲テレビアニメ「たまゆら2期」放送開始 ●「豊町魅力アップ事業（3ヶ年）」による先進地視察（島根県玉造温泉） ●「天満神社・菅公の井戸」説明板設置 ●「みたらい通史総集編・20号」重伝建地区選定20周年記念号発行 ■2013年度保存修理（間接事業2件）
2014	●重伝建地区選定20周年イベント「御手洗・懐かしの写真展」 ●NHK広島発地域ドラマ「戦艦大和のカレイライス」ロケ（11月放送） ●重伝建地区選定20周年イベント「俳人・栗田樗堂と御手洗展」 ●「恵比寿神社・住吉神社」説明板設置 ●重伝建地区選定20周年イベント「みたらい万華鏡」（シンポジウム・町家公開・満舟寺ご開帳・サイクルイベント） ▲「乙女座」が「ひろしまたてものがたりベストセレクション30」に選定（広島県） ■旧金子家住宅修復工事開始 ●重伝建地区選定20周年記念イベント「春の茶会」 ●「みたらいMAP（4種）」発行 ●重伝建地区選定20周年記念誌「御手洗・町並み保存20年の歩み」発行 ■2014年度保存修理（間接事業2件）
2015	●「重伝建を考える会さくら部」呉市環境美化ボランティア表彰 ▲広島県主催「小商いメッセin海の街」開催 ●穂高健一氏講演会「幕末の真実に迫る！幕末の広島藩の活躍がなぜ歴史から消されたか」主催 ●「満舟寺」説明板設置 ●「若胡子屋跡」暖簾新調 ●「御手洗みらい計画」概要版（豊町魅力アップ事業） ●「重伝建を考える会」ホームページ開設 ■2015年度保存修理（間接事業2件）
2016	●「重伝建を考える会」が「国土交通大臣表彰」受賞 ●呉広域商工会「豊町御手洗地区ミュージアム構想実現プロジェクト」調査研究を実施 ●「重伝建を考える会」の事務所を「潮待ち館」に設置 ■2016年度保存修理（間接事業2件）
2017	●「御手洗まちづくり憲章」制定 ●旧金子家住宅特別公開記念講演「茶道上田宗箇流と旧金子家茶室」開催（呉市との共催） ●大政奉還150周年記念講演「芸州広島藩はなぜ大政奉還の運動へ進んだか」開催 ■2017年度保存修理（間接事業2件）

出典：御手洗重伝建を考える会HPより抜粋

## (活用)

空き家活用を積極的に推し進め、定住化と地域おこしに繋げます。

## (活力)

地元へ賑わいと活力とを呼び起こし、町を未来へと引き継ぎます。

このように、建物、景観、風情、文化をセットにして資源ととらえ、それを交流に使い、地域おこしに活用し、まちに活力をもたらすという明確な方針が描いてある。

そして、これらの理念を実現するための申し合わせ事項として、以下の項目が決められている。

## 「町並みと景観を守るために」

- ①既存の建物や樹木等の外観は勝手に変更しない。
- ②景観にそぐわない看板やポスターは掲示しない。
- ③自販機・室外機等は、景観に配慮して設置する。
- ④美観を損ねるようなものは、通り沿いに置かない。

## 「風情と秩序を維持するために」

- ①道路や溝はこまめに掃除し、ゴミを放置しない。
- ②灰皿が設置されていない場所では、喫煙しない。
- ③車は適正な場所に駐車し、街の風情を妨げない。
- ④集落の風情を妨げる騒音、宣伝等の行為は慎む。

## 「地域の継続と発展のために」

- ①町並みの維持のため、空き家の解消に協力する。
- ②地域社会の継続のため、定住化対策を継続する。
- ③賑わいの創造のため、建物を積極的に活用する。
- ④品格や風情を著しく損なう事業等は、行わない。

これらの申し合わせ事項は、既存の建物や樹木等の外観は勝手に変更しないを除けば、「豊町御手洗伝統的建造物群保存地区保存計画」また「呉市伝統的建造物群保存地区保存条例」の、住民が行うことができる上乗せ事項である。ここに住民が交流まちづくりをしようとする、積極的な意志の現れを見ることができる。

申し合わせ事項の「町並みと景観を守るために」

と「風情と秩序を維持するために」にある各項は、暮らしのルールという程度のもになっている。重伝建は文化財であるが、そこで暮らす限り、暮らしのルールは必要である。むしろ文化財を守り、活用することに、大いに住民参加の余地があると理解すべきである。

そして「地域の継続と発展のために」の各項は、空き家の解消、定住化対策といった重たい事項を含んでいる。住民がどこまで行うことができるか、注目される場所である。

このまちづくり憲章については、数年前から意見が出ていた。妻籠、白川郷、竹富島等の重伝建地区を参考に、考える会が案を作成した。もちろん住民の同意抜きでできるものではないので、自治会で承認をえた。罰則規定はないが、申し合わせを意識して住民は生活している。

なお、申し合わせ事項には外部資本などに「売らない」<sup>4)</sup>という項目は入っていない。それは空き家の多さという地区の現状からして、保存・活用しようという立場にとって、むしろ効果的ではないからである。内部の住民で保存・活用するのがベストであろうが、内部だけで行えないときは、外部に開くのも一つの考えである。

重伝建空間は、建物、景観、風情、文化であり、一輪挿しを飾り、みなでガイドしようとする住民からなる。そしてそれはコモンズである。例えば建物の保存・活用、ガイド等それぞれ諸力の調整が必要である。そこに外部の力が係わることも交流である。そして調整がうまくいったとき、単独では得ることができない結果が生まれる。

## (2) 豊町魅力アップ事業

この憲章の裏打ちとなる事業が、豊町魅力アップ事業として進められてきた。同事業は呉市の「くれ協働事業提案制度」<sup>5)</sup>に応募し、助成を受けて実施されている。応募資料によれば、中心団体は御手洗自治会であり、構成員として考える会、御手洗女性会、御手洗老人会、呉広域商工会青年部豊支部、豊市民センターが挙げられている。同事業は2013年度、2014年度、2015年度の3年間の事業である。豊町と冠してあるが、内容は御手洗地

区の魅力アップ事業である。図2に同事業の流れを挙げた。

御手洗地区の魅力は、考える会が再発見し創り上げてきた、上記の重伝建空間である。

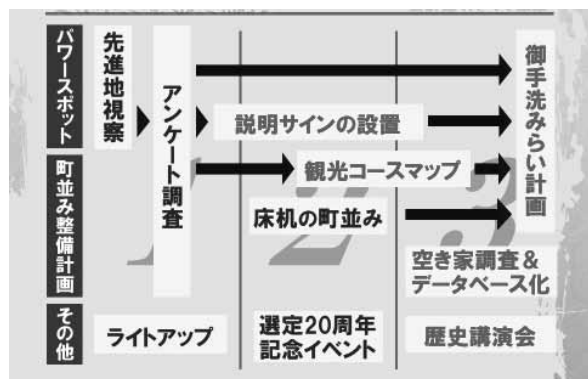


図2 3ヶ年の事業の流れ

出典：豊町魅力アップ事業平成27年度報告資料より

2013年度は先進地(玉造温泉)の視察とアンケート調査を行い、説明サインの設置と観光コースマップづくりという事業を生み出している。説明サインの設置は2013年度～2015年度にかけて行われ、観光コースマップづくりは2014年度～2015年度に4種類(基本マップ、ご利益マップ、史跡マップ、石碑マップ)が作成されている。

そして平成26年度には重伝建選定20周年記念事業が行われている。「懐かしの写真展」,「俳人・栗田栲堂展」,「選定記念シンポジウム」,「満舟寺秘仏ご開帳」などである。なお予定されていたが、台風のため実施されなかったものもある。この間の事業は、いずれもこれまで創り上げてきた資源を磨くことを行っている。

### (3) 空き家調査

なお、同時に、この事業では御手洗地区の基盤に迫ろうという活動がなされている。その一つが地区の空き家の調査・データベース化である。各家庭に、現在の状態、聞き取りを聞くアンケート調査を行っている。その際は、足で稼ぐ、あるいは知り合いからアンケートを渡してもらうという方法を使った。結果が地図に落とされている(図3)。地図に落とされることで、視覚的にとらえ

ることができるようになっている。

現在の御手洗地区は102世帯からなる。聴き取りでは、概数で、空き家住宅50軒。住人が住んでいるが、一人暮らし高齢者世帯が13世帯。後継ぎがいるのが11世帯である。2008年調査時点の聴き取りでは、重伝建地区内にある住宅のうち、4割程度が日常的に空き家になっていた。また空き家でなくてもその3割程度が一人暮らし高齢者であった。将来を考えることのできる、子ども世代と同居している家庭は10軒程度ということであった<sup>6)</sup>。

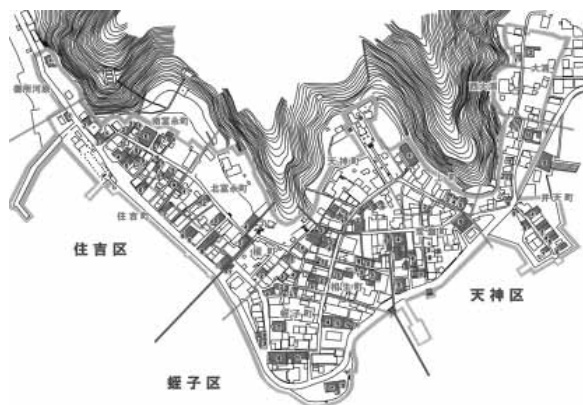


図3 空き家状況

塗りつぶしてあるのが空き家

出典：豊町魅力アップ事業2015年度報告資料より

御手洗地区の人口減少は長期的趨勢であるが、それは現在も変わってはいないといえよう。とくに前回調査時と比べて、空き家がまた増えている。

空き家対策は市街地部でも、また重伝建地区でも懸案となっている。住んでいない家は傷みややすく、管理も難しい。修理・修景といった点での景観整備への影響も考えられる。そして何よりもそこで生活するうえで、防災性の低下、防犯性の低下、ごみの不法投棄、衛生の悪化、悪臭の発生といった問題がある<sup>7)</sup>。住んでいく中で、守り、活用していくという憲章の考えからすれば、空き家はやはり大きな問題である。

呉市の空き家対策においても、住民・自治会等に情報提供、連携・協働を求めているが<sup>8)</sup>、具体的にどのような活動ができるのか注目されるところである。

また空き家の増加は人口減少の象徴である。地域社会の持続性が損なわれるという事象である。空き家対策の根本は、人が住むことである。それは人口減少に歯止めがかかるということである。いずれにせよ、考える会の活動は、地域社会の持続性という根幹に触れようとしている。

#### (4) 御手洗みらい計画

次に「御手洗みらい計画（概要）」である。これも地区住民へのアンケートで意見収集を行い、作成されている。しかし現在も、概要にとどまっている。

内容を表2にまとめた。そこにあるように、交流資源を磨くこと、受け入れ体制を整えること、そして交流を進めると同時に、地域社会の持続性にも取り組もうとしている。憲章にあった姿勢がここでも確認できる。

そして御手洗みらい計画（概要）の具体化の一つが、御手洗ミュージアム構想（エコミュージアム構想）である。全国商工会連合会の2016年度小規模事業者地域力活用新事業 全国展開支援事業（調査研究事業）に、呉広域商工会の『豊町御手洗地区ミュージアム構想実現プロジェクト』が認定され、「豊町御手洗地区 ミュージアム構想実現プロジェクト委員会」が動きだしている。同プロジェクトの目標は「御手洗の街並み全体を博物館（ミュージアム）に見立て、街並み、施設、人、歴史、文化、自然などを作品ととらえ、それらを育成・展示し、継続・展開させるためのアクションを地域全体で起こすこと」<sup>9)</sup>である。

重伝建地区を、エコミュージアムに取り込んでまちづくりを行っている地域は他にもあり<sup>10)</sup>、重伝建地区の保存・活用とエコミュージアムの考えには重なり合うものがある。またこれまで考える

表2 御手洗みらい計画（概要）

方針	分類	方向	対象・内容
観光スポットの質的向上	文化施設	機能・テーマの再構築	江戸みなとまち展示館。若胡子屋跡。七卿落遺跡。旧柴屋住宅。
		施設の活用の充実	旧金子家住宅（修復中）：お茶会を軸にした活用。乙女座：興業的に成り立つ企画。
	神社	パワースポットの魅力UP	恵美寿神社。住吉神社。天満神社。
	寺・公園	美観整備・アクセス向上	満舟寺。大東寺。歴史の見える丘公園。
観光受け入れ体制の充実	観光案内	訪問者への応対	御手洗休憩所：観光の入り口として機能。潮待ち館：町の情報ストックと活用。
	宿泊施設	多様なニーズに対応	研修施設ふるさと学園。脇坂家。一棟貸しを検討中。ゲストハウスを検討中。
	飲食・土産物	新規参入の誘致	船宿カフェ若長。船宿ギャラリー脇屋。鍋焼きうどん尾州屋。御手洗みかんろうそく。
	インバウンド・体験型観光		和文化体験。シーカヤック体験。
町並みと周辺環境の整備	エリア別の修景	イメージの設定	常盤通り：江戸の粋。蛭子通り：大正の洋館。住吉通り：お店通り。相生通り：昭和レトロ。
	観光関連の工作物	観光客の誘導	公衆トイレ。案内サイン。喫煙スポット。通り名表示板。
	生活関連の工作物	景観の保護	街灯の修景。ごみステーションの移転。空き地の演出。看板・のぼりの規制。
	道路・護岸	安全性確保と修景	県道の狭隘部分。御手洗港付近の景観。台風被害後の住吉通り。住吉通りの防潮堤。
	交通アクセス	利便性の向上	御手洗港の活用推進。バス待合所の整備。駐車場の再整備。しまなみ海道との連結。
定住対策と地域の復興	定住促進とコミュニティの保持		県の定住促進イベント（11/6～8）。祭り・行事の継続。地域コミュニティの保持。

出典：豊町魅力アップ事業2015年度報告資料より作成

会が行ってきた活動の延長、発展とみなしうる。その意味でエコミュージアムへの展開は有効な視点といえる。

### 3. 考える会の特徴

#### (1) 内部と外部の接続

以上、考える会の活動を中心に、架橋後のまちづくりの動きをみてきた。基本的には会の当初の路線が継承され、またその深化、あるいは発展ととらえられる取り組みを行おうとしていることがわかる。

ここで、これまで御手洗地区の取り組みを引っ張ってきた考える会の、御手洗地区における位置づけについて考察する。

岩井は、「全国伝統的建造物群保存地区協議会」に属する68の市町村担当者へのアンケート結果として、「まちづくり組織が多いところは観光客数も多く、地元の努力が高いといえるだろう」<sup>11)</sup>と述べている。このまちづくり組織には伝統的な地域団体や新しいまちづくり系NPOの団体が含まれている。地元の努力があることが成功の秘訣といえよう。そして伝統的な地域団体とNPOのようなアソシエーションが連携していることも、その一つと考えられる。

御手洗地区における考える会の位置づけを示しておく（図4）。第一の特徴は、考える会はアソシエーションであるが、自治会と係わりを持っているということである。一般的には、旧来から地域生活の管理を行ってきたのは、自治会をはじめ、

年齢・属性別集団や行政協力集団などの伝統的な地域団体である。ただし高齢化や人口減少により、これらの集団の力が弱くなってきたことは事実である。しかしそこにある種のアソシエーションが生まれる場合、それが地域生活を活性化する可能性がある。

考える会は、御手洗地区の中から生まれてきたアソシエーションである。同会は、初代会長を務めたA氏の呼びかけで、仲間を中心に動き始め、平成6年に42名で結成された。当初から個人的に知っている人をたどって、他出住民にも呼びかけ、会員になってもらっている。聞き取りによれば、現在会員は140名で、74名が豊町住民（その内、御手洗地区以外が10名）、豊町以外が70名弱（主には他出住民、縁のあった人5～6名）である。昔は若い人は入りにくかった。最近若い人が入るようになったという。収入は市からの助成と会費（年2,000円）、若干の寄付金である。事業収入はない。

会の役職は会長、副会長、会計、事務局長があり、ここで活動案をつくる。年1回総会を開き、ここが決定機関となる。

考える会は、もともとは自治会とは別組織である。以前、自治会の機能強化めざして、自治会を中心とした連合組織をつくり、部会で動かし、その中に考える会も入るといった試みがされたことがある。これは力のあるアソシエーションを使った、地域社会の活性化の試みである。

逆に、御手洗憲章に見るように、重伝建空間の保存・活用として考える会が進めてきた取り組みは、地域社会のルールとするところまで発展すると、地区住民の協調行動を必要とする。そうであるためには、住民組織と係わりを持たざるを得ない。現在の考える会と自治会との関係は、考える会は自治会の構成組織ではないが、考える会のメンバーが地域住民組織の役員でもあり、連絡・調整がとれているというものである。

もう一つの特徴は、外部とつながっているということである。当初から重伝建選定を、まちづくりに使おうという構想があった。その方法が観光である。過疎が進むと、心の過疎に陥る。そうい

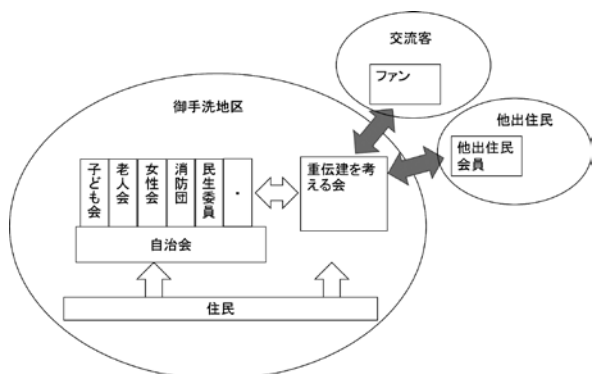


図4 御手洗地区における重伝建を考える会の位置づけ  
出典：筆者が作成



う心に灯りをともすのは、外部の評価である。すばらしいと思わせるものが、ここにはある。それなら、まちをさらに磨こうというエネルギーを生む。考える会はこのような循環をつくろうとしていた。

外部の評価の一つは、他出住民および交流客の目である。考える会の広報誌である『みたらい通志』にある「おたより」から、御手洗についての外部の評価を挙げてみよう。

表3は「おたより」を抜粋し、分類したものである。御手洗のまちについては、自然、文化、町並み・歴史についての記述があり、御手洗の中心的要素として評価されていることがわかる。そして人についても記述があり、頑張っている、暖かい、親切という評価である。また自分にとっては、故郷、田舎、懐かしさ、ゆったり、郷愁、なごむといったイメージが記述されている。他出住民、あるいは交流客にとっても、懐かしい、ゆったり、

なごむといったイメージを提供できていることがわかる。トータルイメージとして、「風まち・潮まち・港町」に「人まち」が加わっても良いかもしれない。

なお御手洗通志の評価でも、同誌が御手洗と他出者との媒介となっていることがわかる。

とくに他出者については、考える会の設立当初から、会員に含んでいる。御手洗出身者による同郷団体はつくられていない。そういう中で、故郷の価値を届けてくれる考える会の活動（またメディアとしてのみたらい通志）は、他出住民に故郷への温かい目を向けさせることになる。他出住民の故郷との係わりには様々ある<sup>12)</sup>。考える会の活動は、他出住民と故郷との橋渡しとなったといえよう。過疎化、高齢化が進んでいくときに、まちづくりの担い手を外部に求めることは自然である。御手洗を故郷とする者はその有力候補である。

表3 御手洗通志「おたより」抜粋

御手洗のまち	自然	みかん狩り（みかんクイズ）
		潮の香と甘い柑橘のにおい
		緑豊かな山々、真っ青い海原、のどかな風景 幼い頃の海や山の景色が心によみがえってきた
御手洗のまち	文化	俳句の盛んな町
		伊能忠敬が来ていたとは
御手洗のまち	町並み・歴史	町の家並みや路地に御手洗の時代の文化
		昔はとても栄えていた
		道には小路も含めてすごーくきれいに掃き清められゴミ一つ落ちていませんでした
御手洗の人		町起こしに頑張っている皆さんの姿
		ボランティアガイドさんも大変わかりやすく説明してくださって
		丁度食事に行くと云う役場のの人に道案内をして貰い
		住んでいる人々の暖かさにふれることが出来ました
		郷里を思い強い思いを持たれ頑張っている人がいる
御手洗通志		ふるさとを離れて生活している者にとって郷土の情報をいち早く知る事が出来
		今後とも、ふるさとの過去・現在そして将来の情報をお知らせください
自分にとって		故郷に帰り暖かく迎えて戴く度に、心から感謝して居ります
		田舎が豊島なのでついなつかしくなって見ました
		心の洗濯地
		東京で生まれ育った私には田舎が有りませんので
		とても懐かしく幼い頃のことが思い出されました
		街では感じられない良さ
		時間がゆったり流れ
		栄えていた往時をしのび郷愁をおぼえる
軒先の一輪挿しどんなに皆の気持ちをなごませて戴けた事でしようか		

出典：御手洗通志「おたより」から抜粋・分類

## （2）御手洗通志

さてこのように、考える会の重要な役割は、内部と外部をつなぐことにある。その仕掛けが広報誌（御手洗通志）である。同誌は1996年に創刊され、現在までに20号を重ねている。発行部数は約5,000である（第20号）。その位置づけは、「御手洗で現在何が行われているのかを豊町内に伝達するだけでなく、島の出身の方々との交換の場、情報交換の場として利用 [する]<sup>13)</sup>」ということにある。まさに内部と外部の媒介である。

島外会員が100人を突破した第4号には、「島から出られている方々に、外から見た御手洗についての意見を聴き、住民と島外者が一緒になって町を育てていきたい」と手ごたえとともに狙いが記されている。

地区内外の読者が、通志を自分たちをつないでくれるものと感じるかどうかは、紙面内容にかかっている。紙面構成をみると、創刊以来続いてきたものと、変わってきたものがある。続いてきたものには「みたらい句集」と「御手洗ものがたり」がある。句集は御手洗の文化的背景を語る

ものであり、いまでも御手洗に息づいていることが示される。

「御手洗ものがたり」もほぼ毎号掲載されてきたもので、表3のような地区内の史跡、事跡、文化、人物が取り上げられ、その歴史的な意味についての解説がなされている。また合わせて特集も生まれ、行事、人物の紹介がなされている。人物紹介、折々のトピックス（ボランティアガイド、潮待ち館）また豊町の味自慢の紹介も続けられている。

第4号までは他出者の御手洗に対する思いが掲載されている。そして第2号からおたよりコーナーが開設され、第8号からはおたよりが一面を使って紹介されている。おたよりの内容は前掲の通りである。御手洗通志の感想や豊町を訪れた感想などが載せられている。そのおたよりにも丁寧にコメントがつけられている。

このように、御手洗通志は内部と外部をつなぐメディアとして機能してきた。しかし2007年には、いったん休刊している。そして考える会誕生20周年を記念して、再発刊されている。

表4 みたらい通志掲載内容

号	発刊年月	御手洗ものがたり	特集
創刊号	1996・12	御手洗天満宮の由来	御手洗やぐら祭り
第2号	1997・8	栗田樗堂（江戸の俳人）	
第3号	1998・8	北前船	
第4号	1999・6	乙女座	
第5号	2000・3	流れ来たり、流れ去るものとしての文化（俳句）	
第6号	2000・10	大正初期・御手洗の賑わい	
第7号	2001・3	ドナルド・リーチが歩いた御手洗の道	
第8号	2001・10	御手洗一族発祥の地「御手洗」	島の時計屋さん－新光時計店
第9号	2002・9	亀塚墓（きふばか）発見！	ゆたかまちのおもしろ新名所を発表！
第10号	2002・9	フィッセルの見た「日本」	
第11号	2003・3	御手洗の金融制度	
第12号	2003・10	豪商鴻池の本殿寄進の謎	
第13号	2004・2	御手洗と薩摩藩	
第14号	2004・10	「御手洗みらい塾'04」を終えて	
第15号	2005・3	御手洗の裏路地	
第16号	2005・7	なぜ、御手洗か？	
第17号	2006・2		
第18号	2006・10	「旅の贈りもの」映画が教えてくれたもの	
第19号	2007・3	御手洗の路地裏	御手洗詣 三社めぐり
第20号	2014・3		御手洗昭和ヘソ時代

出典：御手洗通志各号より抜粋

#### 4. おわりに—地域社会の持続可能性

以上、考える会の活動を中心に、御手洗地区の架橋後のまちづくりの動きを見てきた。では御手洗地区のまちづくりはこれからどこに向かうのだろうか。活動内容では、交流活動という従来の活動の継承とともに、新たに地区の持続可能性を問う活動（空き家対策、移住）にも係ろうとしている。それらは簡単なことではないが、行政、企業に任せるのではなく、自分たちも取り組もうとする姿勢には敬意を払いたい。

さて、まちづくりの本質は住民参加にある。交流を通して心に灯りをともすというストーリーは達成できた。次はその力を地域社会の持続性に向けるときであろう。御手洗地区の動きをみると、その時期になっていると思える。

しかし御手洗地区のように人口減少が進んだところでは、内部で担い手を育てていくことは難しい。そういう時に外部の力をあてにするのは自然であろう。

以下、地区の持続可能性に係わって、いくつかの点を述べる。第一は、観光と交流の選択についてである。持続可能性の根本は、そこに人が住むことにある。聴き取りでは、この10年間で、定年後のUターンが2世帯、後継ぎないし同居でのUターンが3世帯、そして移住が1世帯あったという。若い世代には生業（仕事）がないと、住むことは困難である。他方、副業としての交流は大いに成り立つであろう。またそれは担い手の生きがいにもなり、地区の魅力をアップさせるであろう。

しかし、聴き取りによれば、現状の客数（年間10,000人程度）であれば、観光化は難しいという。他方で、静かに暮らしたいという住民もいる。観光と生活の衝突は望まれていない。節度のある消費が望ましい。これまで考える会は、節度のある世界をつくってきた。しかし地域社会の持続性を考えるには観光化への志向も選択の一つである。

以前の報告書では、これから目指すものとして、スローツーリズムを含んだ交流事業という提案をした（図5参照）。この考えは今も同じである。現在、検討されているエコミュージアム構想にも

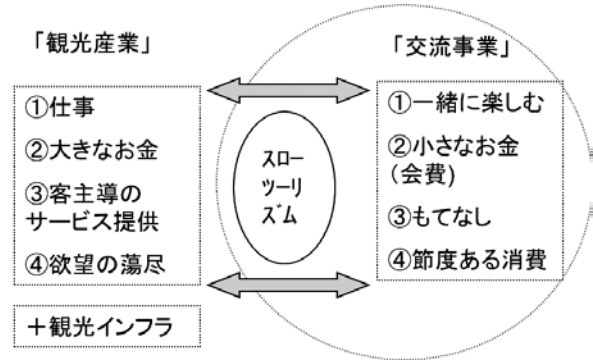


図5 観光と交流

出典：『呉市豊町の観光振興についての調査研究—「新しい観光」によるまちづくり—』報告書p.6

当てはまる。観光産業そのものを目指すのではなく、交流に軸足を置いた活動である。仕事は観光インフラ（宿泊、飲食、土産、交通）への就業で充当する。そして観光インフラは、地域内に当該施設を置く必要はなく、周辺にあれば良い。観光客と共に、交流客もそれを利用する。

第二に、重伝建空間のハードな資源についてである。現在も、毎年2軒ぐらいの修理が続いているが、予定のもの（ストック）が30軒ぐらいあり、終了まで10年くらいはかかるという。修理は個別所有者からの申し込みで、考える会がアドバイスとかはしない。しかし修理が必要な家屋からの申し込みがないという。保存修理が進むと、まちはますますきれいになっていくであろう。しかし人の住まないまちは、映画のセットのようなものである。上述の通り、御手洗地区はそれを目指さない。

最後に、考える会の御手洗地区における位置づけについてである。考える会があることで、御手洗地区のまちづくりが活性化したのは事実である。同会が修景・修復を取りまとめ、管理機能を高めていくこともあるかもしれない。さらに事業化を目指して、まちづくりの機能をさらに強めていくという選択肢もあるだろう。既に一般社団法人が立ち上げられている。あるいは、他の地域団体とともに、地域の総合管理機能を果たしていくことも考えられる。考える会の会長経験者は次のように述べている。

御手洗自治会を中心に、考える会や高齢者の会「常磐会」等の諸団体がそれぞれの特徴をフルに生かし、連携を取りながら行政と強い絆で結ばれることです。そうして協働交流を持ちながら「福祉の御手洗・防災の御手洗」といわれる先進地を目指し、「安心・安全・楽しい御手洗」を構築していきたいものです。<sup>14)</sup>

総合的な地域管理組織は自治会であることを前提にした像である。担い手がいて、頑張ってきた、20年かけてここまで来た御手洗地区である。心に灯りがともった後の、深化・発展が期待される。

## 謝 辞

本稿執筆にあたっては、重伝建を考える会の関係者の方、呉市役所職員の方にご協力を得た。ここに記して感謝する。

## 注

- 1) 大藤文夫, 2008, 交流する人々—重要伝統的建造物群保存地区を活用したまちづくり, 社会情報学研究Vol.14, pp.19-20.
- 2) 望戸亮乃, 北川沙織, 和田希美加, 大藤文夫, 鶴岡和幸, 2009, 『呉市豊町の観光振興についての調査研究—「新しい観光」によるまちづくり—』報告書, p.5.
- 3) 御手洗地区, 広島県  
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/199963.pdf>
- 4) 妻籠では、保存優先の原則を掲げ、「売らない」、「貸さない」、「こわさない」の三原則を貫いている（『妻籠宿を守る住民憲章』昭和46年7月25日）。また竹富島では、保全優先の基本理念を掲げ、「売らない」、「汚さない」、「乱さない」、「壊さない」、「生かす」の原則を守っている（『竹富島憲章』昭和61年）。両者とも、外部資本から守るため、売らないことが第一に掲げられている。
- 5) 本制度は、「行政と協働で実施することにより、より良いまちづくりにつながり、幅広い協働の実践につながる」提案事業（以下「事業」という。）に対し、その事業に要する経費の全部または一部を助成するという制度である。助成対象事業の公募、プレゼンテーション等による審査会などの手続きを経て、助成先が決定される。  
呉市ホームページ  
<https://www.city.kure.lg.jp/soshiki/4/kurekon.html>
- 6) 上掲報告書, p.6.
- 7) 空き家の現状と課題, 国土交通省,  
<https://www.mlit.go.jp/common/001125948.pdf>
- 8) 呉市, 2017, 呉市空家等対策計画, p.35.
- 9) 広島県商工会連合会HP,  
<https://www.active-hiroshima.jp/activenews/5620/>
- 10) 山口県萩市は、1970年代に重伝建地区を観光資源とし、マス・ツーリズムを成功させてきた。しかし、観光客の減少による危機感から、「おたから」がまちじゅうにあるという、萩まちじゅう博物館構想を打ち出し、実行している。萩では観光と交流を区別してはいないが、生活の身近にあるものを資源として開くということは、そこに生活と衝突しない作法が求められる。それは交流に近づいていく。  
また萩まちじゅう博物館のポイントは、住民参加にある。それはNPOを通じた参加と、地縁団体を通じた参加に分けられる。
- 11) 岩井正, 2007, 伝建地区（伝統的建造物群保存地区）の現状と課題：伝建地区全国アンケートからみたまちづくりのサステナビリティ, 創造都市研究2(1), p.1.
- 12) 例えば、小・中のクラス会を、夏祭りの時に行う等がある。
- 13) みたらい通信創刊号, 1996, 御手洗 重伝建を考える会, p.10.
- 14) みたらい通志第20号, 2014, 重伝建を考える会, p.8.